楢ノ木大学士の野宿

宮沢賢治

青空文庫

楢ノ木大学士は宝石学の専門だ。
ある晩大学士の小さな家へ、
「貝の火兄弟商会」の、
赤鼻の支配人がやって来た。
「先生、ごく上等の蛋白石の注文があるのですがどうでせう、お探しをねがへませんでせうか。もっともごくごく上等のやつをほしいのです。何せ相手がグリーンランドの途方もない成金ですから、ありふれたものぢゃなかなか承知しないんです。」
大学士は葉巻を横にくはへ、
雲母紙を張った天井を、
斜めに見上げて聴いてゐた。
「たびたびご迷惑で、まことに恐れ入りますが、いかゞなもんでございませう。」
そこで楢ノ木大学士は、
にやっと笑って葉巻をとった。
「うん、探してやらう。蛋白石のいゝのなら、流紋玻璃を探せばいゝ。探してやらう。僕は実際、一ぺんさがしに出かけたら、きっともう足が宝石のある所へ向くんだよ。そして宝石のある山へ行くと、奇体に足が動かない。直覚だねえ。いや、それだから、却って困ることもある

よ。たとへば僕は一千九百十九年の七月に、アメリカのヂャイアントアーム会社の依嘱を受けて、紅宝玉（ルビー）を探しにビルマへ行ったがね、やっぱりいつか足は紅宝玉（ルビー）の山へ向く。それからちやんと見附かって、帰らうとしてもなかなか足があがらない。つまり僕と宝石には、一種の不思議な引力が働いてゐる、深く埋（うづ）まった紅宝玉（ルビー）どもの、日光の中へ出たいといふその熱心が、多分は僕の足の神経に感ずるのだらうね。その時も実際困ったよ。山から下りるのに、十一時間もかかったよ。けれどもそれがいまのバララゲの紅宝玉坑（ルビーかう）さ。」

「ははあ、そいつはどうもとんだご災難でございました。しかしいかゞでございませう。こんども多分はそんな工合（ぐあひ）に参りませうか。」

「それはもうきっとさう行くね。たゞその時に、僕が何かの都合のために、たとへばひどく疲れてゐるとか、狼（おほかみ）に追はれてゐるとか、あるいはひどく神経が興奮してゐるとか、そんなやうな事情から、ふっとその引力を感じないといふやうなことはあるかもしれない。しかしとにかく行って来よう。二週間目にはきっと帰るから。」

「それでは何分お願ひいたします。これはまことに軽少ですが、当座の旅費のつもりです。」

貝の火兄弟商会の、
鼻の赤いその支配人は、
ねずみ色の状袋を、
上着の内衣嚢（うちポケット）から出した。

「さうかね。」
大学士は別段気にもとめず、
手を延ばして状袋をさらひ、
自分の衣嚢に投げこんだ。
「では何分とも、よろしくお願ひいたします。」
そして「貝の火兄弟商会」の、
赤鼻の支配人は帰って行った。
次の日諸君のうちの誰かは、
きっと上野の停車場で、
途方もない長い外套を着、
変な灰色の袋のやうな背嚢をしょひ、
七キログラムもありさうな、
素敵な大きなかなづちを、
持った紳士を見ただらう。
それは楢の木大学士だ。
宝石を探しに出掛けたのだ。
出掛けた為にたうとう楢ノ木大学士の、

野宿といふことも起ったのだ。
三晩といふもの起ったのだ。

野宿第一夜

四月二十日の午后四時頃、
例の楢ノ木大学士が
「ふん、此の川筋があやしいぞ。たしかにこの川筋があやしいぞ」
とひとりぶつぶつ言ひながら、
からだを深く折り曲げて
眼一杯にみひらいて、
足もとの砂利をねめまはしながら、
兎のやうにひょいひょいと、
葛丸川の西岸の
大きな河原をのぼって行った。
両側はずゐぶん嶮しい山だ。
大学士はどこまでも溯って行く。

けれどもたうとう日も落ちた。
その両側の山どもは、
一生懸命の大学士などにはお構ひなく
ずんずん黒く暮れて行く。
その上にちょっと顔を出した
遠くの雪の山脈は、
さびしい銀いろに光り、
てのひらの形の黒い雲が、
その上を行ったり来たりする。
それから川岸の細い野原に、
ちょろちょろ赤い野火が這ひ、
鷹によく似た白い鳥が、
鋭く風を切って翔けた。
楢ノ木大学士はそんなことには構はない。
まだどこまでも川を溯って行かうとする。
ところがたうとう夜になった。
今はもう河原の石ころも、

赤やら黒やらわからない。

「これはいけない。もう夜だ。寝なくちゃなるまい。今夜はずゐぶん久しぶりで、愉快な露天に寝るんだな。うまいぞうまいぞ。ところで草へ寝ようかな。かれ草でそれはたしかにいゝけれども、寝てゐるうちに、野火にやかれちや一言(いちごん)もない。よしよし、この石へ寝よう。まるでね台だ。ふんふん、実に柔らかだ。いゝ寝台(ねだい)だぞ。」

その石は実際柔らかで、

又敷布のやうに白かった。

そのかはり又大学士が、

腕をのばして背嚢(はいなう)をぬぎ、

肱(ひぢ)をまげて外套(ぐわいたう)のまゝ、

ごろりと横になったときは、

外套のせなかに白い粉が、

まるで一杯についたのだ。

もちろん学士はそれを知らない。

又そんなこと知ったとこで、

あわてて起きあがる性質でもない。

水がその広い河原の、

向ふ岸近くをごうと流れ、
空の桔梗のうすあかりには、
山どもがのっきのっきと黒く立つ。
大学士は寝たまゝそれを眺め、
又ひとりごとを言ひ出した。
「ははあ、あいつらは岩頸だな。岩頸だ、岩頸だ。相違ない。」
そこで大学士はいゝ気になって、
仰向けのまゝ手を振って、
岩頸の講義をはじめ出した。
「諸君、手っ取り早く云ふならば、岩頸といふのは、地殻から一寸頸を出した太い岩石の棒である。その頸がすなはち一つの山である。えゝ。一つの山である。ふん。どうしてそんな変なものができたといふなら、そいつは蓋し簡単だ。えゝ、こゝに一つの火山がある。熔岩を流す。その熔岩は地殻の深いところから太い棒になってのぼって来る。火山がだんだん衰へて、その腹の中まで冷えてしまふ。熔岩の棒もかたまってしまふ。それから火山は永い間に空気や水のために、だんだん崩れる。たうとう削られてへらされて、しまひには上の方がすっかり無くなって、前のかたまった熔岩の棒だけが、やっと残るといふあんばいだ。この棒は大抵頸だけを出して、一つの山になってゐる。それが岩頸だ。ははあ、面白いぞ、つまりそのこれは夢の中

のもやだ、もや、もや、もや。そこでそのつまり、鼠(ねずみ)いろの岩頸だがな、その鼠いろの岩頸が、きちんと並んで、お互に顔を見合せたり、ひとりで空うそぶいたりしてゐるのは、大変おもしろい。ふふん。」

それは実際その通り、

向ふの黒い四つの峯は、

四人兄弟の岩頸で、

だんだん地面からせり上って来た。

楢(なら)ノ木大学士の喜びやうはひどいもんだ。

「ははあ、こいつらはラクシャンの四人兄弟だな。よくわかった。ラクシャンの四人兄弟だ。よしよし。」

注文通り岩頸は

丁度胸までせり出して

ならんで空に高くそびえた。

一番右は

たしかラクシャン第一子

まっ黒な髪をふり乱し

大きな眼をぎろぎろ空に向け

しきりに口をぱくぱくして
何かどなってゐる様だが
その声は少しも聞えなかった。
右から二番目は
たしかにラクシャンの第二子だ。
長いあごを両手に載せて睡ってゐる。
次はラクシャン第三子
やさしい眼をせはしくまたたき
いちばん左は
ラクシャンの第四子、末っ子だ。
夢のやうな黒い瞳をあげて
じっと東の高原を見た。
楢ノ木大学士がもっとよく
四人を見ようと起き上ったら
俄かにラクシャン第一子が
雷のやうに怒鳴り出した。
「何をぐづぐづしてるんだ。潰してしまへ。灼いてしまへ。こなごなに砕いてしまへ。早くや

れっ。」
楢ノ木大学士はびっくりして
大急ぎで又横になり
いびきまでして寝たふりをし
そっと横目で見つゞけた。
ところが今のどなり声は
大学士に云ったのでもなかったやうだ。
なぜならラクシャン第一子は
やっぱり空へ向いたまゝ
素敵などなりを続けたのだ。
「全体何をぐづぐづしてるんだ。砕いちまへ、砕いちまへ、はね飛ばすんだ。はね飛ばすんだよ。火をどしゃどしゃ噴くんだ。熔岩（ようがん）の用意っ。熔岩。早く。畜生。いつまでぐづぐづしてるんだ。熔岩、用意っ。もう二百万年たってるぞ。灰を降らせろ、灰を降らせろ。なぜ早く支度をしないか。」
しづかなラクシャン第三子が
兄をなだめて斯（か）う云った。
「兄さん。少しおやすみなさい。こんなしづかな夕方ぢゃありませんか。」

兄は構はず又どなる。

「地球を半分ふきとばしちまへ。石と石とを空でぶっつけ合せてぐらぐらする紫のいなびかりを起せ。まっくろな灰の雲からかみなりを鳴らせ。えい、意気地なしども。降らせろ、降らせろ、きらきらの熔岩で海をうづめろ。海から騰る泡で太陽を消せ、生き残りの象から虫けらのはてまで灰を吸はせろ、えい、畜生ども、何をぐづぐづしてるんだ。」

ラクシャンの若い第四子が

微笑って兄をなだめ出す。

「大兄さん、あんまり憤らないで下さいよ。イーハトブさんが向ふの空で、又笑ってゐますよ。」

それからこんどは低くつぶやく。

「あんな銀の冠を僕もほしいなあ。」

ラクシャンの狂暴な第一子も

少ししづまって弟を見る。

「まあいゝさ、お前もしっかり支度をして次の噴火にはあのイーハトブの位になれ。十二ヶ月の中の九ヶ月をあの冠で飾れるのだぞ。」

若いラクシャン第四子は

兄のことばは聞きながし

遠い東の
雲を被った高原を
星のあかりに透し見て
なつかしさうに呟やいた。

「今夜はヒームカさんは見えないなあ。あのまっ黒な雲のやつは、ほんたうにいやなやつだなあ、今日で四日もヒームカさんや、ヒームカさんのおっかさんをマントの下にかくしてるんだ。僕一つ噴火をやってあいつを吹き飛ばしてやらうかな。」

ラクシャンの第三子が
少し笑って弟に云ふ。

「大へん怒ってるね。どうかしたのかい。えゝ。あの東の雲のやつかい。あいつは今夜は雨をやってるんだ。ヒームカさんも蛇紋石のきものがずぶぬれだらう。」

「兄さん。ヒームカさんはほんたうに美しいね。兄さん。この前ね、僕、こゝからかたくりの花を投げてあげたんだよ。ヒームカさんのおっかさんへは白いこぶしの花をあげたんだよ。そしたら西風がね、だまって持って行って呉れたよ。」

「さうかい。ハッハ。まあいゝよ。あの雲はあしたの朝はもう霽れてるよ。ヒームカさんがまばゆい新らしい碧いきものを着てお日さまの出るころは、きっと一番さきにお前にあいさつするぜ。そいつはもうきっとなんだ。」

「だけど兄さん。僕、今度は、何の花をあげたらいゝだらうね。もう僕のとこには何の花もないんだよ。」
「うん、そいつはね、おれの所にね、桜草があるよ、それをお前にやらう。」
「ありがたう、兄さん。」
「やかましい、何をふざけたことを云ってるんだ。」
暴(あら)っぽいラクシャンの第一子が
金粉の怒鳴り声を
夜の空高く吹きあげた。
「ヒームカってなんだ。ヒームカって。
ヒームカって云ふのは、あの向ふの女の子の山だらう。よわむしめ。あんなものとつきあふのはよせと何べんもおれが云ったぢゃないか。ぜんたいおれたちは火から生れたんだぞ青ざめた水の中で生れたやつらとちがふんだぞ。」
ラクシャンの第四子(ししこ)は
しょげて首を垂れたが
しづかな直(ぢか)かの兄が
弟のために長兄をなだめた。
「兄さん。ヒームカさんは血統はいゝのですよ。火から生れたのですよ。立派なカンランガン

ですよ。」
ラクシャンの第一子は
尚更怒って
立派な金粉のどなりを
まるで火のやうにあげた。
「知ってるよ。ヒームカはカンランガンさ。火から生れたさ。それはいゝよ。けれどもそんなら、一体いつ、おれたちのやうにめざましい噴火をやったんだ。あいつは地面まで騰って来る途中で、もう疲れてやめてしまったんだ。今こそ地殻ののろのろのぼりや風や空気のおかげで、おれたちと肩をならべてゐるが、元来おれたちとはまるで生れ付きがちがふんだ。きさまたちには、まだおれたちの仕事がよくわからないのだ。おれたちの仕事はな、地殻の底の底で、とけてとけて、まるでへたになった岩漿や、上から押しつけられて古綿のやうにちぢまった蒸気やらを取って来て、いざといふ瞬間には大きな黒い山の塊を、まるで粉々に引き裂いて飛び出す。
煙と火とを固めて空に抛げつける。石と石とをぶっつけ合せていなづまを起す。百万の雷を集めて、地面をぐらぐら云はせてやる。丁度、楢ノ木大学士といふものが、おれのどなりをひょっと聞いて、びっくりして頭をふらふら、ゆすぶったやうにだ。ハッハッハ。
山も海もみんな濃い灰に埋まってしまふ。平らな運動場のやうになってしまふ。その熱い灰の

上でばかり、おれたちの魂は舞踏していゝ。いゝか。もうみんな大さわぎだ。さて、その煙が納まって空気が奇麗に澄んだときは、こっちはどうだ、いつかまるで空へ届くくらゐ高くなって、まるでそんなこともあったかといふやうな顔をして、銀か白金かの冠ぐらゐをかぶって、きちんとすましてゐるのだぞ。」

ラクシャンの第三子は

しばらく考へて云ふ。

「兄さん、私はどうも、そんなことはきらひです。私はそんな、まはりを熱い灰でうづめて、自分だけ一人高くなるやうなそんなことはしたくありません。水や空気がいつでも地面を平らにしようとしてゐるでせう。そして自分でもいつでも低い方低い方と流れて行くでせう、私はあなたのやり方よりは、却(かへ)ってあの方がほんたうだと思ひます。」

暴(あら)っぽいラクシャン第一子が

このときまるできらきら笑った。

きらきら光って笑ったのだ。

（こんな不思議な笑ひやうを

いままでおれは見たことがない、

愕(おどろ)くべきだ、立派なもんだ。）

楢ノ木学士が考へた。

暴っぽいラクシャンの第一子が
ずゐぶんしばらく光ってから
やっとしづまって斯う云った。
「水と空気かい。あいつらは朝から晩まで、俺らの耳のそば迄来て、世界の平和の為に、お前らの傲慢を削るとかなんとか云ひながら、毎日こそこそ、俺らを擦って耗して行くが、まるっきりうそさ。何でもおれのきくとこに依ると、あいつらは海岸のふくふくした黒土や、美しい緑いろの野原に行って知らん顔をして溝を掘るやら、濠をこさへるやら、それはどうも実にひどいもんださうだ。話にも何にもならんといふこった。」
ラクシャンの第三子も
つい大声で笑ってしまふ。
「兄さん。なんだか、そんな、こじつけみたいな、あてこすりみたいな、芝居のせりふのやうなものは、一向あなたに似合ひませんよ。」
ところがラクシャン第一子は
案外に怒り出しもしなかった。
きらきら光って大声で
笑って笑って笑ってしまった。
その笑ひ声の洪水は

空を流れて遙かに遙かに南へ行って
ねぼけた雷のやうにとゞろいた。
「うん、さうだ、もうあまり、おれたちのがらにもない小理窟は止さう。おれたちのお父さんにすまない。お父さんは九つの氷河を持っていらしゃったさうだ。そのころは、こゝらは、一面の雪と氷で白熊や雪狐や、いろいろなけものが居たさうだ。お父さんはおれが生れるときなくなられたのだ。」
俄かにラクシャンの末子が叫ぶ。
「火が燃えてゐる。火が燃えてゐる。大兄さん。大兄さん。ごらんなさい。だんだん拡がります。」
ラクシャン第一子がびっくりして叫ぶ。
「熔岩、用意っ。灰をふらせろ、えい、畜生、何だ、野火か。」
その声にラクシャンの第二子が
びっくりして眼をさまし、
その長い顎をあげて、
眼を釘づけにされたやうに
しばらく野火をみつめてゐる。
「誰かやったのか。誰だ、誰だ、今ごろ。なんだ野火か。地面の挨をさらさらっと掃除す

る、てまへなんぞに用はない。」
するとラクシャンの第一子が
ちょっと意地悪さうにわらひ
手をばたばたと振って見せて
「石だ、火だ。熔岩だ。用意っ。ふん。」
と叫ぶ。
ばかなラクシャンの第二子が
すぐ釣り込まれてあわて出し
顔いろをぽっとほてらせながら
「おい兄貴、一吠えしようか。」
と斯う云った。
兄貴はわらふ、
「一吠えってもう何十万年を、きさまはぐうぐう寝てゐたのだ。それでもいくらかまだ力が残ってゐるのか」
無精な弟は只一言
「ない」
と答へた。

そして又長い顎をうでに載せ、
ぽっかりぽっかり寝てしまふ。
しづかなラクシャン第三子が
ラクシャンの第四子に云ふ
「空が大へん軽くなったね、あしたの朝はきっと晴れるよ。」
「えゝ今夜は鷹が出ませんね」
兄は笑って弟を試す。
「さっきの野火で鷹の子供が焼けたのかな。」
弟は賢く答へた。
「鷹の子供は、もう余程、毛も剛くなりました。それに仲々強いから、きっと焼けないで遁げたでせう」
兄は心持よく笑ふ。
「そんなら結構だ、さあもう兄さんたちはよくおやすみだ。楢ノ木大学士と云ふやつもよく睡ってゐる。さっきから僕等の夢を見てゐるんだぜ。」
するとラクシャン第四子が
ずるさうに一寸笑ってかう云った。
「そんなら僕一つおどかしてやらう。」

兄のラクシャン第三子が
「よせよせいたづらするなよ」
と止めたが
いたづらの弟はそれを聞かずに
光る大きな長い舌を出して
大学士の額をべろりと嘗めた。
大学士はひどくびっくりして
それでも笑ひながら眼をさまし
寒さにがたっと顫へたのだ。
いつか空がすっかり晴れて
まるで一面星が瞬き
まっ黒な四つの岩頸が
たゞしくもとの形になり
じっとならんで立ってゐた。

野宿第二夜

わが親愛な楢ノ木大学士は
例の長い外套を着て
夕陽をせ中に一杯浴びて
すっかりくたびれたらしく
度々空気に噛みつくやうな
大きな欠伸をやりながら
平らな熊出街道を
すたすた歩いて行ったのだ。
俄かに道の右側に
がらんとした大きな石切場が
口をあいてひらけて来た。
学士は咽喉をこくっと鳴らし
中に入って行きながら
三角の石かけを一つ拾ひ
「ふん、こゝも角閃花崗岩」と
つぶやきながらつくづくと
あたりを見れば石切場、

石切りたちも帰ったらしく
小さな笹の小屋が一つ
淋しく隅にあるだけだ。
「こいつはうまい。丁度いゝ。どうもひとのうちの門口に立って、もしもし今晩は、私は旅の者ですが、日が暮れてひどく困ってゐます。今夜一晩泊めて下さい。たべ物は持ってゐますから支度はなんにも要りませんなんて、へっ、こんなこと云ふのは、もう考へてもいやになる。そこで今夜はこゝへ泊らう。」
大学士は大きな近眼鏡を
ちょっと直してにやにや笑ひ
小屋へ入って行ったのだ。
土間には四つの石かけが
炉の役目をしその横には
榾もいくらか積んである。
大学士はマッチをすって
火をたき、それからビスケットを出し
もそもそ喰べたり手帳に何か書きつけたり
しばらくの間してゐたが

おしまひに火をどんどん燃して
ごろりと藁(わら)にねころんだ。
夜中になって大学士は
「うう寒い」
と云ひながら
ばたりとはね起きて見たら
もうたきゞが燃え尽きて
たゞのおきだけになってゐた。
学士はいそいでたきゞを入れる。
火は赤く愉快に燃え出し
大学士は胸をひろげて
つくづくとよく暖る。
それから一寸(ちょっと)外へ出た。
二十日の月は東にかゝり
空気は水より冷たかった、
学士はしばらく足踏みをし
それからたばこを一本くはへマッチをすって

「ふん、実にしづかだ、夜あけまでまだ三時間半あるな。」
つぶやきながら小屋に入った。
ぼんやりたき火をながめながら
わらの上に横になり
手を頭の上で組み
うとうととうとうとした。
突然頭の下のあたりで
小さな声で云ひ合ってるのが聞えた。
「そんなに肱を張らないでお呉れ。おれの横の腹に病気が起るぢゃないか。」
「おや、変なことを云ふね、一体いつ僕が肱を張ったね」
「そんなに張ってゐるぢゃないか、ほんたうにお前この頃湿気を吸ったせいかひどくのさばり出して来たね」
「おやそれは私のことだらうか。お前のことぢゃなからうかね、お前もこの頃は頭でみりみり私を押しつけようとするよ。」
大学士は眼を大きく開き
起き上ってその辺を見まはしたが
誰れも居らない様だった。

声はだんだん高くなる。
「何がひどいんだよ。お前こそこの頃はすこしばかり風を呑んだせいか、まるで人が変ったやうに意地悪になったね。」
「はてね、少しぐらゐ僕が手足をのばしたってそれをとやかうお前が云ふのかい。十万二千年昔のことを考へてごらん。」
「十万何千年前とかがどうしたの。もっと前のことさ、十万百万千万年、千五百の万年の前のあの時をお前は忘れてしまってゐるのかい。まさか忘れはしないだらうがね。忘れなかったら今になって、僕の横腹を肱で押すなんて出来た義理かい。」
大学士はこの語を聞いて
すっかり愕ろいてしまふ。
「どうも実に記憶のいゝやつらだ。えゝ、千五百の万年の前のその時をお前は忘れてしまってゐるのかい。まさか忘れはしないだらうがね、えゝ。これはどうも実に恐れ入ったね、いったい誰だ。変に頭のいゝやつは。」
大学士は又そろそろと起きあがり
あたりをさがすが何もない。
声はいよいよ高くなる。
「それはたしかに、あなたは僕の先輩さ。けれどもそれがどうしたの。」

「どうしたのぢゃないぢゃないか。僕がやっと体骼と人格を完成してほっと息をついてるとお前がすぐ僕の足もとでどんな声をしたと思ふね。こんな工合さ。もし、ホンブレンさま、こゝの所で私もちっとばかり延びたいと思ひまする。どうかあなたさまのおみあしさきにでも一寸取りつかせて下さいませ。まあかう云ふお前のことばだったよ。」

楢ノ木学士は手を叩く。

「ははあ、わかった。ホンブレンさまと、一人はホルンブレンドだ。すると相手は誰だらう。わからんなあ。けれども、ふふん、こいつは面白い。いよいよ今日も問答がはじまった。しめ、しめ、これだから野宿はやめられん。」

大学士は煙草を新らしく

一本出してマッチをする

声はいよいよ高くなる。

もっともいくら高くても

せいぜい蚊の軍歌ぐらゐだ。

「それはたしかにその通りさ、けれどもそれに対してお前は何と答へたね。いゝえ、そいつは困ります、どうかほかのお方とご相談下さいと斯んなに立派にはねつけたらう。」

「おや、とにかくさ。それでもお前はかまはず僕の足さきにとりついたんだよ。まあ、そんなこと出来たもんだらうかね。もっとも誰かさんは出来たやうさ。」

「あてこするない。とりついたんぢゃないよ。お前の足が僕の体骼の頭のとこにあったんだよ。僕はお前よりももっと前に生れたジッコさんを頼んだんだよ。今だって僕はジッコさんは大事に大事にしてあげてるんだ。」

大学士はよろこんで笑ひ出す。

「はっはっは、ジッコさんといふのは磁鉄鉱だね、もうわかったさ、喧嘩の相手はバイオタイトだ。して見るとなんでもこの辺にさっきの花崗岩のかけらがあるね、そいつの中の鉱物がかやかや物を云ってるんだね。」

なるほど大学士の頭の下に

支那の六銭銀貨のくらゐの

みかげのかけらが落ちてゐた。

学士はいよいよにこにこする。

「さうかい。そんならいゝよ。お前のやうな恩知らずは早く粘土になっちまへ。」

「おや、呪ひをかけたね。僕も引っ込んぢゃゐないよ。さあ、お前のやうな、」

「一寸お待ちなさい。あなた方は一体何をさっきから喧嘩してるんですか。」

新らしい二人の声が

一緒にはっきり聞え出す。

「オーソクレさん。かまはないで下さい。あんまりこいつがわからないもんですからね。」

「双子さん。どうかかまはないで下さい。あんまりこいつが恩知らずなもんですからね。」
「ははあ、双晶のオーソクレースが仲裁に入った。これは実におもしろい。」
大学士はたきびに手をあぶり
顔中口にしてよろこんで云ふ。
二つの声が又聞える。
「まあ、静かになさい。僕たちは実に実に長い間堅く堅く結び合ってあのまっくらなまっくらなとこで一緒にまはりからのはげしい圧迫やすてきな強い熱にこらへて来たではありませんか。一時はあまりの熱と力にみんな一緒に気違ひにでもなりさうなのをじっとこらへて来たではありませんか。」
「さうです、それは全くその通りです。けれども苦しい間は人をたのんで楽になると人をそねむのはぜんたいいゝ事なんでせうか。」
「何だって。」
「ちょっと、ちょっと、ちょっとお待ちなさい。ね。そして今やっとお日さまを見たでせう。そのお日さまも僕たちが前に土の底でコングロメレートから聞いたとは大へんなちがひではありませんか。」
「えゝ、それはもうちがってます。コングロメレートのはなしではお日さまはまっかで空は茶いろなもんだと云ってゐましたが今見るとお日さまはまっ白で空はまっ青です。あの人はうそ

つきでしたね。」

双子の声が又聞えた。

「さあ、しかしあのコングロメレートといふ方は前にたゞの砂利だったころはほんたうに空が茶いろだったかも知れませんね。」

「さうでせうか。とにかくうそをつくこととひとの恩を仇でかへすのとはどっちも悪いことですね。」

「何だと、僕のことを云ってるのかい。よしさあ、僕も覚悟があるぞ。決闘をしろ、決闘を。」

「まあ、お待ちなさい。ね、あのお日さまを見たときのうれしかったこと。どんなに僕らは叫んだでせう。千五百万年光といふものを知らなかったんだもの。あの時鋼の槌がギギンギギンと僕らの頭にひゞいて来ましたね。遠くの方で誰かが、あゝお前たちもたうとうお日さまの下へ出るよと叫んでゐた、もう僕たちの誰と誰とが一緒になって誰と誰とがわかれなければならないか。一向判らなかったんですね。さよならさよならってみんな叫びましたねえ。そしたら急にパッと明るくなって僕たちは空へ飛びあがりましたねえ。あの時僕はお日さまの外に何か赤い光るものを見たやうに思ふんですよ。」

「それは僕も見たよ。」

「僕も見たんだよ、何だったらうね、あれは。」

大学士は又笑ふ。

「それはね、明らかにたがねのさきから出た火花だよ。パチツて云ったらう。そして熱かったらう。」

ところが学士の声などは

鉱物どもに聞えない。

「そんなら僕たちはこれからさきどうなるでせう。」

双子の声が又聞えた。

「さあ、あんまりこれから愉快なことでもないやうですよ。僕が前にコングロメレートから聞きましたがどうも僕らはこのまゝ又土の中にうづもれるかさうでなければ砂か粘土かにわかれてしまふだけなやうですよ。この小屋の中に居たって安心にもなりません。内に居たって外に居たってたかが二千年もたって見れば結局おんなじことでせう。」

大学士はすっかりおどろいてしまふ。

「実にどうも達観してるね。この小屋の中に居たって外に居たってたかが二千年も経(た)って見れば粘土か砂のつぶになる、実にどうも達観してる。」

その時俄(には)かにピチピチ鳴り

それからバイオタが泣き出した。

「あゝ、いた、いた、いた、いた、痛ぁい、いたい。」

「バイオタさん。どうしたの、どうしたの。」

「早くプラヂョさんをよばないとだめだ。」
「ははあ、プラヂョさんといふのはプラヂオクレースで青白いから医者なんだな。」
大学士はつぶやいて耳をすます。
「プラヂョさん、プラヂョさん。プラヂョさん。」
「はあい。」
「バイオタさんがひどくおなかが痛がってます。どうか早く診(み)て下さい。」
「はあい、なあにべつだん心配はありません。かぜを引いたのでせう。」
「ははあ、こいつらは風を引くと腹が痛くなる。それがつまり風化だな。」
大学士は眼鏡(めがね)をはづし
半巾(はんけち)で拭(ふ)いて呟(つぶ)やく。
「プラヂョさん。お早くどうか願ひます。只今(ただいま)気絶をいたしました。」
「はぁい。いまだんだんそっちを向きますから。ようっと。はい、はい。これは、なるほど。ふふん。一寸脈(ちょっと)をお見せ、はい。こんどはお舌、ははあ、よろしい。そして第十八へきかい予備面が痛いと。なるほど、ふんふん、いやわかりました。どうもこの病気は恐(こは)いですよ。それにお前さんのからだは大地の底に居たときから慢性りよくでい病にかかって大分軟化してますからね、どうも恢復(くわいふく)の見込がありません。」
病人はキシキシと泣く。

「お医者さん。私の病気は何でせう。いつごろ私は死にませう。」
「さやう、病人が病名を知らなくてもいゝのですがまあ蛭石病の初期ですね、所謂ふう病の中の一つ。俗にかぜは万病のもとと云ひますがね。それから、えゝと、も一つのご質問はあなたの命でしたかね。さやう、まあ長くても一万年は持ちません。お気の毒ですが一万年は持ちません。」
「あゝあ、さっきのホンブレンのやつの呪ひが利いたんだ。」
「いや、いや。そんなことはない。けだし、風病にかかって土になることはけだしすべて吾人に免かれないことですから。けだし。」
「あゝ、プラヂョさん。どんな手あてをいたしたらよろしうございませうか。」
「さあ、さう云ふ工合に泣いてゐるのは一番よろしくありません。からだをねぢってあちこちのへきかいよび面にすきまをつくるのはなほさら、よろしくありません。その他風にあたれば病気のしゃうけつを来します。日にあたれば病勢がつのります。霜にあたれば病勢が進みます。露にあたれば病状がかう進します。雪にあたれば症状が悪変します。じっとしてゐるのはなほさらよろしくありません。それよりは、その、精神的に眼をつむって観念するのがいゝでせう、わがこの恐れるところの死なるものは、そもそも何であるか、その本質はいかん、生死巌頭に立って、をかしいぞ、はてな、をかしい、はて、これはいかん、あいた、いた、いた、いた、いた、」

「プラヂョさん、プラヂョさん、しつかりなさい。一体どうなすつたのです。」
「うむ、私も、うむ、風病のうち、うむ、うむ。」
「苦しいでせう、これはほんたうにお気の毒なことになりました。」
「うむ、うむ、いゝえ、苦しくありません。うむ。」
「何かお手あていたしませう。」
「うむ、うむ、実はわたくしも地面の底から、うむ、うむ、大分カオリン病にかかつてゐた、うむ、オーソクレさん、オーソクレさん。うむ、今こそあなたにも明します。あなたも丁度わたし同様の病気です。うむ。」
「あゝ、やっぱりさやうでございましたか。全く、全く、全く、実に、実に、あいた、いた、いた、いた。」
そこでホンブレンドの声がした。
「ずゐぶん神経過敏な人だ。すると病気でないものは僕とクォーツさんだけだ。」
「うむ、うむ、そのホンブレンもバイオタと同病。」
「あ、いた、いた、いた。」
「おや、おや、どなたもずゐぶん弱い。健康なのは僕一人。」
「うむ、うむ、そのクォーツさんもお気の毒ですがクウシャウ中の瓦斯（ガス）が病因です。うむ。」
「あいた、いた、いた、いた。た。」

「ずゐぶんひどい医者だ。漢方の藪医だな。たうとうみんな風化かな。」
大学士は又新らしく
たばこをくはへてにやにやする。
耳の下では鉱物どもが
声をそろへて叫んでゐた。
「あ、いた、いた、いた、いた、た、たた。」
みんなの声はだんだん低く
たうとうしんとしてしまふ。
「はてな、みんな死んだのか。あるいは僕だけ聞えなくなったのか。」
大学士はみかげのかけらを
手にとりあげてつくづく見て
パチッと向ふの隅へ弾く。
それから楢を一本くべた。
その時はもうあけ方で
大学士は背嚢から
巻煙草を二包み出して
楢のお礼に藁に置き

背嚢をしょひ小屋を出た。
石切場の壁はすっかり白く
その西側の面だけに
月のあかりがうつってゐた。

野宿第三夜

（どうも少し引き受けやうが軽率だったな。グリーンランドの成金がびっくりする程立派な蛋白石などを、二週間でさがしてやらうなんてのは、実際少し軽率だった。
どうも斯う人の居ない海岸などへ来て、つくづく夕方歩いてゐると東京のまちのまん中で鼻の赤い連中などを相手にして、いゝ加減の法螺を吹いたことが全く情けなくなっちまふ。どうだ、この頁岩の陰気なこと。全くいやになっちまふな。おまけに海も暗くなったし、なかなか、流紋玻璃にも出っ会はさない。それに今夜もやっぱり野宿だ。野宿も二晩ぐらゐはいゝが、三晩となっちゃうんざりするな。けれども、まあ、仕方もないさ。ビスケットのあるうちは、歩いて野宿して、面白い夢でも見る分が得といふもんだ。）
例の楢ノ木大学士が
衣嚢に両手を突っ込んで

少しせ中を高くして
つくづく考へ込みながら
もう夕方の鼠(ねずみ)いろの
頁岩の波に洗はれる
海岸を大股(おほまた)に歩いてゐた。
全く海は暗くなり
そのほのじろい波がしらだけ
一列、何かけもののやうに見えたのだ。
いよいよ今日は歩いても
だめだと学士はあきらめて
ぴたっと岩に立ちどまり
しばらく黒い海面と
向ふに浮ぶ腐った馬鈴薯(いも)のやうな雲を
眺(なが)めてゐたが、又ポケットから
煙草(たばこ)を出して火をつけた。
それからくるっと振り向いて
陸の方をじっと見定めて

急いでそっちへ歩いて行った。
そこには低い崖があり
崖の脚には多分は濤で
削られたらしい小さな洞があったのだ。
大学士はにこにこして
中へはひって背嚢をとる。
それからまっくらなとこで
もしゃもしゃビスケットを喰べた。
ずうっと向ふで一列濤が鳴るばかり。
「ははあ、どうだ、いよいよ宿がきまって腹もできると野宿もそんなに悪くない。さあ、もう一服やって寝よう。あしたはきっとうまく行く。その夢を今夜見るのも悪くない。」
大学士の吸ふ巻煙草が
ポツンと赤く見えるだけ、
「斯う納まって見ると、我輩もさながら、洞熊か、洞窟住人だ。ところでもう寝よう。
闇の向ふで
濤がぼとぼと鳴るばかり
鳥も啼かなきゃ

洞をのぞきに人も来ず、と。ふん、斯(こ)んなあんばいか。寝ろ、寝ろ。」

大学士はすぐとろとろする
疲れて睡(ねむ)れば夢も見ない
いつかすっかり夜が明けて
昨夜の続きの頁岩(けつがん)が
青白くぼんやり光ってゐた。

大学士はまるでびっくりして
急いで洞を飛び出した。
あわてて帽子を落しさうになり
それを押へさへもした。

「すっかり寝過ごしちゃった。ところでおれは一体何のために歩いてゐるんだったかな。えゝと、よく思ひ出せないぞ。たしかに昨日も一昨日(をととひ)も人の居ない処(ところ)をせっせと歩いてゐたんだが。いや、もっと前から歩いてゐたぞ。もう一年も歩いてゐるぞ。その目的はと、はてな、忘れたぞ。こいつはいけない。目的がなくて学者が旅行をするといふことはない、必ず目的があるのだ。化石ぢゃなかったかな。えゝと、どうか第三紀の人類に就(つ)いてお調べを願ひます、と、誰(たれ)か云ったやうだ。いゝや、さうぢゃない、白堊紀(はくあ)の巨(おほ)きな爬虫類(はちゅう)の骨骼(こっかく)を博物館の方から頼まれてあるんですがいかゞでございませう、一つお探しを願はれますまいかと、斯うぢゃなかっ

たかな。斯うだ、斯うだ、ちがひない。さあ、ところでこゝは白堊系の頁岩だ。もうこゝでおれは探し出すつもりだったんだ。なるほど、はじめてはっきりしたぞ。さあ探せ、恐竜の骨骼だ。恐竜の骨骼だ。」

学士の影は
黒く頁岩の上に落ち
大股に歩いてゐたから
踊ってゐるやうに見えた。
海はもの凄いほど青く
空はそれより又青く
幾きれかのちぎれた雲が
まばゆくそこに浮いてゐた。
「おや出たぞ。」
楢ノ木大学士が叫び出した。
その灰いろの頁岩の
平らな奇麗な層面に
直径が一米ばかりある
五本指の足あとが

深く喰ひ込んでならんでゐる。
所々上の岩のために
かくれてゐるが足裏の
皺(しわ)まではっきりわかるのだ。
「さあ、見附けたぞ。この足跡の尽きた所には、きっとこいつが倒れたまゝ化石してゐる。巨(おほ)きな骨だぞ。まづ背骨なら二十米はあるだらう。巨きなもんだぞ。」
大学士はまるで雀躍(こをどり)して
その足あとをつけて行く。
足跡はずゐぶん続き
どこまで行くかわからない。
それに太陽の光線は赭(あか)く
たいへん足が疲れたのだ。
どうもをかしいと思ひながら
ふと気がついて立ちどまったら
なんだか足が柔らかな
泥に吸はれてゐるやうだ。
堅い頁岩(けつがん)の筈(はず)だったと思って

楢ノ木大学士はうしろを向いた。
そしたら全く愕いた。
さっきから一心に跡けて来た
巨きな、蟇の形の足あとは
なるほどずうっと大学士の
足もとまでつゞいてゐて
それから先ももっと続くらしかったが
も一つ、どうだ、大学士の
銀座でこさへた長靴の
あともぞろっとついてゐた。
「こいつはひどい。我輩の足跡までこんなに深く入るといふのは実際少し恐れ入った。けれどもそれでも探求の目的を達することは達するな。少し歩きにくいだけだ。さあもう斯うなったらどこまでだって追って行くぞ。」
学士はいよいよ大股に
その足跡をつけて行った。
どかどか鳴るものは心臓
ふいごのやうなものは呼吸、

そんなに一生けん命だったが
又そんなにあたりもしづかだった。
大学士はふと波打ぎはを見た。
濤(なみ)がすっかりしづまってゐた。
たしかにさっきまで
寄せて吠(ほ)えて砕けてゐた濤が
いつかすっかりしづまってゐた。
「こいつは変だ。おまけにずゐぶん暑いぢゃないか。」
大学士はあふむいて空を見る。
太陽はまるで熟した苹果(りんご)のやうで
そこらも無暗(むやみ)に赤かった。
「ずゐぶんいやな天気になった。それにしてもこの太陽はあんまり赤い。きっとどこかの火山が爆発をやった。その細かな火山灰が正しく上層の気流に混じて地球を包囲してゐるな。けれどもそれだからと云って我輩のこの追跡には害にならない。もうこの足あとの終るところにあの途方もない爬虫(はちゅう)の骨がころがってるんだ。我輩はその地点を記録する。もう一足だぞ。」
大学士はいよいよ勢(いきほひ)こんで
その足跡をつけて行く。

ところが間もなく泥浜は
岬(みさき)のやうに突き出した。
「さあ、こゝを一つ曲って見ろ。すぐ向ふ側にその骨がある。けれども事によったらすぐ無いかも知れない。すぐなかったらも少し追って行けばいゝ。それだけのことだ。」
大学士はにこにこ笑ひ
立ちどまって巻煙草(まきたばこ)を出し
マッチを擦(す)って煙を吐く。
それからわざと顔をしかめ
ごくおうやうに大股(おほまた)に
岬をまはって行ったのだ。
ところがどうだ名高い楢(なら)ノ木大学士が
釘付(くぎづ)けにされたやうに立ちどまった。
その眼は空しく大きく開き
その膝(ひざ)は堅くなってやがてふるへ出し
煙草もいつか泥に落ちた。
青ぞらの下、向ふの泥の浜の上に
その足跡の持ち主の

途方もない途方もない雷竜氏が
いやに細長い頸をのばし
汀の水を呑んでゐる。
長さ十間、ざらざらの
鼠いろの皮の雷竜が
短い太い足をちゞめ
厭らしい長い頸をのたのたさせ
小さな赤い眼を光らせ
チュウチュウ水を呑んでゐる。
あまりのことに楢ノ木大学士は
頭がしいんとなってしまった。
「一体これはどうしたのだ。中生代に来てしまったのか。中生代がこっちの方へやって来たのか。ああ、どっちでもおんなじことだ。とにかくあすこに雷竜が居て、こっちさへ見ればかけて来る。大学士も魚も同じことだ。見るなよ、見るなよ。僕はいま、ごくこっそりと戻るから。どうかしばらく、こっちを向いちゃいけないよ。」
いまや楢ノ木大学士は
そろりそろりと後退りして

来た方へ遁げて戻る。
その眼はじっと雷竜を見
その手はそっと空気を押す。
そして雷竜の太い尾が
まづ見えなくなりその次に
山のやうな胴がかくれ
おしまひ黒い舌を出して
びちょびちょ水を呑んでゐる
蛇に似たその頭がかくれると
大学士はまづ助かったと
いきなり来た方へ向いた。
その足跡さへずんずんたどって
遁げてさへ行くならもう直きに
汀に濤も打って来るし
空も赤くはなくなるし
足あともも泥に食ひ込まない
堅い頁岩の上を行く。

崖（がけ）にはゆふべの洞（ほら）もある
そこまで行けばもう大丈夫
こんなあぶない探険などは
今度かぎりでやめてしまひ
博物館へも断はらせて
東京のまちのまん中で
赤い鼻の連中などを
相手に法螺（ほら）を吹いてればいゝ。
大体こんな計算だった。
それもまるきり電（いなづま）のやうな計算だ。
ところが楢（なら）ノ木大学士は
も一度ぎくっと立ちどまった。
その膝（ひざ）はもうがたがたと鳴り出した。
見たまへ、学士の来た方の
泥の岸はまるでいちめん
うじゃうじゃの雷竜（らいりゅう）どもなのだ。
まっ黒なほど居ったのだ。

長い頸(くび)を天に延ばすやつ
頸をゆっくり上下に振るやつ
急いで水にかけ込むやつ
実にまるでうじゃうじゃだった。
「もういけない。すっかりうまくやられちゃった。いよいよおれも食はれるだけだ。大学士の号も一所になくなる。雷竜はあんまりひどい。前にも居るしうしろにも居る。まあたゞ一つたよりになるのはこの岬(みさき)の上だけだ。そこに登っておれは助かるか助からないか、事によったら新生代の沖積世が急いで助けに来るかも知れない。さあ、もうたったこの岬だけだぞ。」
学士はそっと岬にのぼる。
まるで蕈(きのこ)とあすなろとの
合の子みたいな変な木が
崖(がけ)にもじゃもじゃ生えてゐた。
そして本当に幸なことは
そこには雷竜が居なかった。
けれども折角登っても
そこらの景色は
あんまりいゝといふでもない、

岬の右も左の方も
泥の渚（なぎさ）は、もう一めんの雷竜だらけ
実にもじゃもじゃしてゐたのだ。
水の中でも黒い白鳥のやうに
頭をもたげて泳いだり
頸をくるっとまはしたり
その厭（いや）らしいこと恐（こは）いこと
大学士はもう眼をつぶった。
ところがいつか大学士は
自分の鼻さきがふっふっ鳴って
暖いのに気がついた。
「たうとう来たぞ、喰はれるぞ。」
大学士は観念をして眼をあいた。
大さ二尺の四つ角な
まっ黒な雷竜（らいりゅう）の顔が
すぐ眼の前までにゅうと突き出され
その眼は赤く熟したやう。

その頸は途方もない向ふの
鼠いろのがさがさした胴まで
まるで管のやうに続いてゐた。
大学士はカーンと鳴った。
もう喰はれたのだ、いやさめたのだ。
眼がさめたのだ、洞穴は
まだまっ暗で恐らくは
十二時にもならないらしかった。
そこで楢ノ木大学士は
一つ小さなせきばらひをし
まだ雷電が居るやうなので
つくづく闇をすかして見る。
外ではたしかに濤の音
「なあんだ。馬鹿にしてやがる。もう睡れんぞ。寒いなあ。」
又たばこを出す。火をつける。

楢ノ木大学士は宝石学の専門だ。

その大学士の小さな家
「貝の火兄弟商会（けいてい）」の
赤鼻の支配人がやって来た。
「先生お手紙でしたから早速とんで来ました。大へんお早くお帰りでした。ごく上等のやつをお見あたりでございましたか、何せ相手がグリーンランドの途方もない成金ですからありふれたものぢゃなかなか承知しないんです。」
大学士は葉巻を横にくはへ
雲母紙（うんもし）を張った天井を
斜めに見ながらかう云った。
「うん探して来たよ、僕は一ぺん山へ出かけるともうどんなもんでも見附からんと云ふことは断じてない、けだしすべての宝石はみな僕をしたってあつまって来るんだね。いやそれだから、此度（こんど）なんかもまったくひどく困ったよ。殊に君注文が割合に柔らかな蛋白石（たんぱくせき）だらう。僕がその山へ入ったら蛋白石どもがみんなざらざら飛びついて来てもうどうしてもはなれないぢゃないか。それが君みんな貴蛋白石（プレシアスオーパル）の火の燃えるやうなやつなんだ。望みのとほりみんな背嚢（はいなう）の中に納めてやりたいことはもちろんだったが、それでは僕も身動きもできなくなるのだから気の毒だったがその中からごくいゝやつだけ撰んださ。」
「ははあ、そいつはどうも、大へん結構でございました。しかし、そのお持ち帰りになりまし

た分はいづれでございますか。一寸拝見をねがひたう存じます。」
「あゝ、見せるよ。たゞ僕はあんな立派なやつだから、事によったらもうすっかり曇ったぢやないかと思ふんだ。実際蛋白石ぐらゐたよりのない宝石はないからね。今日虹のやうに光ってゐる。あしたは白いたゞの石になってしまふ。今日は円くて美しい。あしたは砕けてこなごなだ。そいつだね、こはいのは。しかしとにかく開いて見よう。この背嚢さ。」
「なるほど。」
貝の火兄弟商会の
鼻の赤いその支配人は
こくっと息を呑みながら
大学士の手もとを見つめてゐる。
大学士はごく無雑作に
背嚢をあけて逆さにした。
下等な玻璃蛋白石が
三十ばかりころげだす。
「先生、困るぢゃありませんか。先生、これでは、何でも、あんまりぢゃありませんか。」
楢ノ木大学士は怒り出した。
「何があんまりだ。僕の知ったこっちゃない。ひどい難儀をしてあるんだ。旅費さへ返せばそ

れでよからう。さあ持って行け。帰れ、帰れ。」
大学士は上着の衣嚢(かくし)から
鼠(ねずみ)いろの皺(しわ)くちゃになった状袋を
出していきなり投げつけた。
「先生困ります。あんまりです。」
貝の火兄弟(けいてい)商会の
赤鼻の支配人は云ひながら
すばやく旅費の袋をさらひ
上着の内衣嚢(うちポケット)に投げ込んだ。
「帰れ、帰れ、もう来るな。」
「先生、困ります。あんまりです。」
たうとう貝の火兄弟商会の
赤鼻の支配人は帰って行き
大学士は葉巻を横にくはへ
雲母紙(うんもし)を張った天井を
斜めに見ながらにやっと笑ふ。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集　第十巻」筑摩書房
　1979（昭和54）年9月15日初版第1刷発行
　1983（昭和58）年4月20日初版第5刷発行
入力：林　幸雄
校正：今井忠夫
2003年4月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

楢ノ木大学士の野宿

宮沢賢治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/